

ゲオルゲ＝クライスにおける 哲学者 E. ラントマンから経済学者 E. ザリーンへの影響*

The Influence of Philosopher E. Landmann on Economist E. Salin in “George-Kreis”

原 田 哲 史

In the literary circle „George-Kreis“ around the poet Stefan George (1868-1933), the economist Edgar Salin was influenced by the philosopher Edith Landmann (1877-1951), who developed a theory of cognition in her book “The Transcendence of Cognition” (“Die Transcendenz des Erkennens”) of 1923. Salin stood at the late stage of the German Historical School of economics. He attempted to overcome the theoretical weak points of the school and to develop it further maintaining its synthetic advantages, in his book “History of Economic Thought” (“Geschichte der Volkswirtschaftslehre”), especially in its second edition of 1929. His main proposal was to construct a higher synthetic theory named “visual theory” (“anschauliche Theorie”), which involves both cultural historical and rational mathematical cognitions. Salin accepted the cognitive theory of Landmann to construct the logical structure of the theory.

Tetsushi Harada

JEL : B15, B 25, B31, B41

キーワード：エトガー・ザリーン、エーディット・ラントマン、シュテファン・ゲオルゲ、
ゲオルゲ＝クライス、直観的理論、ドイツ歴史学派

Keywords : Edgar Salin, Edith Landmann, Stefan George, George-Kreis,
Anschauliche Theorie, German Historical School

* 本稿は筆者の論文 Die Anschauliche Theorie als Fortsetzung der historischen Schule im George-Kreis: Edgar Salin unter dem Einfluss Edith Landmanns, In: R. Köster, W. Plumpe, B. Schefold, K. Schönhärl (Hrsg.): *Das Ideal des schönen Lebens und die Wirklichkeit der Weimarer Republik*, Berlin 2009 を、手を加えつつ日本語に訳したものである。

I

ドイツの叙情詩人シュテファン・ゲオルゲ (1868～1933 年) を囲む支持者たちの集団「ゲオルゲ＝クライス George-Kreis」に属していた経済学者エトガー・ザリーン (1892～1974 年) は、彼の「直観的理論 anschauliche Theorie」を構想するに際して、歴史学派がなお優位に立ちながらも盛期を過ぎようとしていたドイツ経済学の状況にあった¹⁾。

歴史学派の領袖グスタフ・シュモラー (1838～1917 年) は、W. ロッシャー (1817～94 年) の「歴史的方法」²⁾ に端を発する、国民経済を歴史的に育まれた文化的・慣習的な個性を有する総体として認識する経済学を目指してきたが、シュモラーには 2 つの論争で露呈されてきた弱点があったのであり、それは 1917 年のシュモラーの死のあと一層ためらわれることなく論じられた。そのひとつが理論形成への志向が希薄であるという問題であって、シュモラーはその点ですでに 1880 年代にオーストリア学派の創始者カール・メンガー (1840～1921 年) によって、いわゆる方法論争において激しく攻撃されていた。歴史的な細目の研究に沈潜したシュモラーの姿勢は、メンガーによれば、「手押し車で何杯かの石と砂〔歴史的な素材〕を建築現場に運んできたことを理由に

1) こうした状況全体について、vgl. Schefold 1992; 原田 2001; シェフォールト 2007。「直観的 anschaulich 理論」はドイツ語の動詞 „anschauen“ (「じかに見つめる」「しっかり見渡す」といった意味) の形容詞形 „anschaulich“ でもって表現される概念である。ザリーンの場合、ややもすれば「直感」や「勘」をもイメージしうる「直観的」と訳すよりは、「じかに見つめる理論」「しっかり見渡す理論」と訳す方が正確に意味を表せるとも思われる。しかしそれでは冗長になってしまうので、筆者はさしあたり高島善哉にならって「直観的理論」と訳しているが (Salin 1929 の高島訳を参照)、「直視的理論」「熟視的理論」「眺望的理論」といった訳語を当てる可能性もあるであろう。また、「直観 Anschuung」は、ヨーロッパの哲学史のなかで様々な論じられてきた概念であり、わが国の哲学研究において通常そのように訳されているので、その伝統がザリーンによって込められている可能もあることから、そのままにしておいた。ただ、少なくとも本稿にあたり精査したかぎりでは、ザリーンに影響を与えたラントマンの認識論のなかで „anaschaulich“ や „Anschuung“ がキーワードとして使われてはいないし、ザリーン自身も伝統的な「直観」論への接合を積極的に行なっているとは思われない。シェフォールト 2007 の「訳者まえがき」の注 (105 頁) 参照。哲学史における「直観」概念の概観として、渡邊・赤松 1998 参照。

2) Roscher 1843, S. III, 邦訳、17 頁。なお、邦訳を参照した場合はそれを示すが、訳文は原文に照らして適宜変更してある。以下も同じ。

建築家〔経済学者〕として認めてもらいたがっている人夫の意向と同じなのである」³⁾。もうひとつは、シュモラーの仕事の客観性が疑問視されたことであり、これは価値判断論争においてマックス・ヴェーバー（1864～1920 年）によって非難された点であった。シュモラーにおいて客観性の疑われる側面は、例えば、彼が社会政策を要請する際に「貧民の王」⁴⁾と自称したフリードリヒ 2 世を挙げてプロイセンを賛美するのみならず、ドイツの国民経済の生成（村落から都市・領邦を経て国民国家へという過程での経済的発展）を叙述する際にもプロイセンの主導的役割とりわけその「重商主義的政策」⁵⁾を称揚していることから窺えるのである。

ヴェーバーは歴史学派経済学を批判的にであれ発展させようと試みたが、それは彼の社会学的な観点からであった。ヴェーバーが非難したのは、賛美したりその実現に向かって努力したりすべきだとされるような理想や、「価値」の「妥当性」について判断することである。ただし、このヴェーバーの非難は社会科学ならびに経済学の方法としての必要性からであって、彼は、学者でも私人としてはそうした理想や価値を保持してもよいし、研究対象の選択においては価値判断が認められるし、また——しばしば歴史的な——価値判断はそれ自体で研究対象として扱われる、と考えた。とはいえ、ヴェーバーが確信するのは、「そうした価値の妥当性を判断するのは信仰の事柄であり、[...] もちろん経験科学の対象ではないのである」⁶⁾。彼によれば、シュモラーはこのことを見誤ったため、間違った仕方ですべて「一方で規範としての実践的な命法の妥当性と、他方で経験的な事実確認の真理妥当性とを [...] むりやり一緒にすること」⁷⁾を試みてしまったのである。

ヴェーバーは、理想や価値判断の代わりに「理念型」概念を社会科学・経済学に導入した。理念型とはメンガーの「抽象的理論」と同様「思考像」であって、「そのなかでは矛盾のないように考えられた諸連関の秩序空間へと、歴史

3) Menger 1884, S. 46, 邦訳、334 頁。引用における [] は原田による補足。以下も同じ。

4) Schmoller 1874, S. 318, 邦訳、127 頁。

5) Schmoller 1884, S. 58, 邦訳、81 頁。

6) Weber 1904, S. 152, 邦訳、13 頁。引用文中の圏点は原著者による。以下も同じ。

7) Weber 1917, S. 501, 邦訳、313 頁。

的な生の特定の諸関係・諸事象をとりまとめる」ものである。それは思考上のモデルとして論理的に辻褄の合った連関そのものであって、規範的な理想ではない。あえて言うならば、定規になぞらえるものであり、長さの認識のための物差しとして役立ち、対象の長さという部分認識のための「道具」⁸⁾ のようなものである。理念型を使ったヴェーバーの有名な作品として「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(1904～05 年) があり、そこで彼は、「資本主義の精神」すなわち「自分の資本の増大への関心を——それは自己目的として前提されているのだが——個々人の義務とする思想」⁹⁾ がプロテスタンティズムの倫理とりわけ予定説にもとづくカルヴァン派の禁欲主義的な倫理を抛り所とする中小の経営者たちにおいて生成したというテーゼを、理念型として設定した。こうした理念型を使ったヴェーバーの諸研究は、近代資本主義が生成したのはとりわけ禁欲主義的なプロテスタンティズムが優位を占めたヨーロッパや北アメリカの諸地域であった、という結論に達した。ただし、それはその尺度をあてがって得られた、当該主題に限られた部分認識であって、国民経済の総体を説明しようとするものではない。

ヴェーバーが歴史学派的な特性を発展させてもいたことは、彼が資本主義経済の歴史的な生成と、そこにおける理念・現実の関係といった問題に着目していることや、諸国民・諸地域の比較に取り組んでいることや、また中小経営の歴史的な役割を——シュモラーがそうであったように——強調していることから、言えるのである。しかし、ヴェーバーは歴史学派の 2 つの重要な論点を放棄した。第 1 に、経済生活における理想の確定ないし追求を、第 2 に、国民経済の総体認識を放棄したのである。ヴェーバーはこれらの放棄と引き換えに歴史学派の遺産を改変して厳密な科学としての社会科学という形で発展させようとした、と言いうる¹⁰⁾。

8) Weber 1904, S. 190-193, 邦訳、59-63 頁。

9) Weber 1904-05, S. 29, 邦訳、29 頁。

10) Vgl. Schmoller 1870; 田村 1993、第 2 章、終章。

II

エトガー・ザリーンは、この2点を放棄せずに歴史学派の遺産をさらに発展させようと考えた。文芸的・美学的な観点から人間生活のすべてを描きかつ若者を導こうとしたゲオルゲに信頼を寄せるザリーンにしてみれば、経済学においても規範的な理想状態の把握は必要だと思われたし、国民経済の総体認識も重要な目的であった。それらをシュモラーとは幾分異なったゲオルゲ的な意味あいで見え直していたとしても、そうであった。さらに、それと同時にザリーンはメンガーとヴェーバーの試みも部分的に自分の「直観的理論」の構想に組み入れようと考えたのである。

ザリーンの名著『経済学史』は何度も改訂されて複数の版が出されているが、諸版を比較してみると「直観的理論」概念が1923年の初版には見られず、1929年の「新訂第2版」で現れて、以後のすべての版には見られることが分かる¹¹⁾。初版と第2版の過渡期において時系列的に着目すべき事柄は2つあり、ひとつは、ゲオルゲ=クライスの女性哲学者エーディット・ラントマン（1877～1951年）の著書『認識の超越性』が『経済学史』初版と同じ1923年に出ていること、もうひとつは、ザリーン自身が『経済学史』初版と第2版の間の1927年に雑誌論文「高度資本主義——ゾムバルト、ドイツ経済学および今日の経済システム」を発表して、そこで初めて「直観的理論」概念を用いていることである。

この連関の意味を探ることは、ザリーンの思想を理解するうえで重要な手掛かりとなる。というのも、後年にまで至る彼の核心をなす思想の生成は初期にまでさかのぼることができ、始動点からそれをより良く理解できるからである。

『経済学史』初版においてザリーンは、ドイツ歴史学派なかでもカール・クニース（1821～98年）を高く評価している。ザリーンによれば、クニースは「世界市民主義」と「永久法則主義」を、ならびにイギリス流の「価値の経済学」の「理論絶対主義」を非難したが、そのみならず「人類・諸国民史の一時

11) ちなみに第3版は1944年、第4版は1951年、第5版（最終版）は『政治経済学——プラトンから今日に至るまでの経済政策思想の歴史』とタイトルが変わって1967年に出ている。ザリーンの『経済学史』の諸版については、原田2002参照。

代における有機的総体と生きたつながりをもつ」新たな理論を探求していたのであって、そうした総合化の理論こそが歴史的な諸事実を国民経済の総体との関連で認識する「政治経済学の理論」¹²⁾ であるとしたのである。しかし、シュモラーはクニースによる新理論の模索を継承せずに数多くの歴史的な細目研究を行なったに留まるので、結果として、様々な歴史的素材を「統合し、関連付けて見渡すという課題」¹³⁾ がないがしろにされてしまった。ザリーンは『経済学史』初版でこのように言うとともに、続けてもうひとつシュモラーの問題点として、社会政策を要請する際に「将来のために闘うことよりも現存するものを賛美することがますます多く」になっていったことを挙げる。そうした賛美はたしかに我々も、上で見たシュモラーのプロイセン賛美に見ることができる。ザリーンはこの問題の原因について、シュモラーが「学問を超えたところにある生の重要性 überwissenschaftliche Lebenswichtigkeit を認識せずに」¹⁴⁾ 研究を進めたことにあると述べて、シュモラーを批判している。注目すべきは、ザリーンがその際ウェーバーのように理想や価値評価それ自体を社会科学・経済学の外に出そうとしているのではなく、シュモラーのプロイセンびいきに反対して「生の重要性」を主張していることである。

ザリーンの理想である「生の重要性」は、肉体のみならずそれよりも貴い精神を有する人間の「生 Leben」の重要性として捉えられるのであり、それはゾムバルトに関する彼の 1927 年論文の冒頭部分から知ることができる¹⁵⁾。ここでは J.W. ゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(1821 年)の第 13 章から引用されており、「気品のある、愛すべき存在」である「シェーネ=ゲーテ」(「美しく善良な婦人」という意味)と呼ばれる婦人が「機械制生産の普及」に嘆く場面がそれである。その婦人は彼女を慕う若い女性たちと友愛でもって結びつきながら素朴な手工業を営んでいるのだが、機械制工業の伸長によって彼女らの手工業が不用なもの・古臭いものとして徐々に追い立てら

12) Salin 1923, S. 35; Knies 1883, S. 24.

13) Salin 1923, S. 37.

14) Salin 1923, S. 37.

15) Salin 1927, S. 314.

れていき、彼女の善良で高貴な魂すなわち「素晴らしい魂 herrliche Seele」が苦悩してしまう、というシーンである。ゲーテはこうした現象を単なる戯曲の一場面として描いているのではなく、「未来全体に」¹⁶⁾ 当てはまるであろうとしている。ザリーンは、機械制生産の普及・蔓延によって病んでしまうが本来尊ぶべき高貴な精神を有する人間存在が重要であることを、「生の重要性」と考えているのである。そして、その救済が最大の課題であることを説くとともに、とはいえ、機能面ですぐれた機械制生産の普及が止められないなかで、最終的には「美しい生と有用な機能」の「調和」¹⁷⁾ を目指すべきことを主張している。

ゲオルゲ=クライスにおいては、学問は芸術よりも下位に置かれる。ゲオルゲによれば、芸術家のみならず学者も、芸術的・精神的な美的観念から発して「別のモデルネ」¹⁸⁾ において素朴な生を蘇生させ開花させるように向かうべきなのである。ゲオルゲにとってゲーテはプラトンと並んで精神史における最重要なフィギュアのひとりであった¹⁹⁾。ザリーンの 1927 年論文の第 1 節ではゲーテ以外にもヘルダーリンとニーチェが挙げられているが、ザリーンにとってゲーテは自分自身のゲオルゲ=クライスへの帰属からしても特別な意味があった。というのも、クライス内でザリーンと同様ユダヤ系で年上の友人として彼とゲオルゲとの仲をとりもちさえたフリードリヒ・グンドルフ (1880～1931 年) ——ハイデルベルク大学教授としてマックス・ヴェーバーのクライスとも行き来していた文学史家²⁰⁾——によるゲーテとロマン主義についての議論がゲオルゲ自身によって高く評価されていたからである²¹⁾。ザリーンのゲーテ賛美は彼の後の作品においても続き、1967 年の『経済学史』最終版にまで至っている²²⁾。

16) Goethe 1821, S. 428-430, 433, 邦訳、368-369、372 頁。

17) Salin 1927, S. 314.

18) Schefold 2005, S. 4, vgl. auch 13. 邦訳 (上)、187 頁、また 197 頁参照。

19) Vgl. Salin 1954, S. 267-269.

20) 上山 2001、31-34 頁参照。

21) Vgl. Salin 1954, S. 80; シェフォールト 2007、108-109、122 頁。

22) Vgl. Salin 1967, S. 190-193.

他方、同じ 1927 年論文においてザリーンは、マックス・ヴェーバーとヴェルナー・ゾムバルト（1863～1941 年）の相違を際立たせている。ザリーンによれば、ヴェーバーが「脱自己化され *entselbstet* 脱魂化された *entseelt* 仕事の究極段階の唱導者、すなわち「客観的」で「没価値的」な学問の唱道者」であるのに対して、ゾムバルトは「歴史と理論の結合、歴史主義と社会主義の結合」²³⁾ を成し遂げた。ザリーンはゾムバルトをヴェーバーよりも高く評価する。というのも、ゾムバルトはとりわけその 1927～28 年の『近代資本主義』第 3 巻において「豊富な素材や問題のすべてを豊かに [...], すなわち資本主義の生と、経済の学問——資本主義と取り組むそれ——とを成すところのそれすべてを豊かに」²⁴⁾ 扱っているからである。「ゾムバルトにおいてなお誤りがあるとしても、ゾムバルトの業績はすべての時代を通じて最もずば抜けた仕事のひとつとして数え上げられる」²⁵⁾ べきである、とザリーンは言うのである。

ザリーンがそこで示しているように、ゾムバルトの『近代資本主義』第 3 巻は、「基礎」「構成」「経過」という 3 つの「主要部分」から成り、各主要部分はまた「基礎」が「原動力」「国家」「技術」から、「構成」が「資本」「労働力」「販売」から、「経過」が「諸要素」「運動諸形態」「歴史的形成」からという具合に 3 つの部分から成っているし、またゾムバルトの『経済生活の秩序』（初版 1925 年、第 2 版 1927 年）でも「経済システム」が「A. 精神」「B. 形態」「C. 技術」という 3 層的な構造として整理され、その各々がさらに複数の下位カテゴリーから成っている。ザリーンによれば、こうした整然とした分類でもってゾムバルトは、シュモラーによって集められたがほとんど未整理に留まっている数多くの歴史的諸事実を体系付けようと試みているのであり、この試みこそ、一国民経済についての、また複数の国民経済相互についての「真の認識、総体認識」へと至るものである。このゾムバルトの試みは——認識論の観点からすればなお不十分でもあるとはいえ——まさに称賛に値する、とザリーンは考えた。しかもザリーンは、ゾムバルトの仕事を理論的な仕事として称賛する

23) Salin1927, S. 318.

24) Salin1927, S. 320.

25) Salin1927, S. 320.

のである。「我々はやはり以前から総体認識の方途のことを理論と呼んでいるのだから、歴史よりも理論こそがゾムバルトの仕事の独自の課題であり業績でもあるのである」²⁶⁾。

ザリーンのゾムバルトへの心酔と結び付きは、ザリーンが 1927 年論文の執筆時にゾムバルト『近代資本主義』第 3 巻のうち既刊の第 1 分冊のみならず未刊の第 2 分冊も——ゾムバルトの好意によって——校正刷りの形ですでに使っていた事実からも分かる²⁷⁾。また 1928 年ザリーンはゾムバルトに宛てて謝意とともに「私は自分の夏学期講義（高度資本主義）の準備をしているのですが、これこそまさに形而上学者〔合理的理論家〕をして「直観的理論家」と頻繁に取り組むようにさせるものです」²⁸⁾と手紙を書いており、ここには、ゾムバルトの「高度資本主義」論がザリーンの論じつつある「直観的理論」と結び付くものであることが示されている。

III

国民経済の総体認識を試みる理論的枠組みのことを、ザリーンは 1927 年論文で「直観的理論」と名付けている。ザリーンが言うには、直観的理論はゾムバルトによつてのみならず、F.v. ゴットル=オットリーリエンフェルトとアルフレート・ヴェーバーによつて試みられているし、明らかにクニースと F. リスト、G.F. クナップによつて、また——限定つきであるが——J.H.v テューネンと B. ヒルデブラントによつても探求されてきたのである。ザリーンによれ

26) Salin 1927, S. 319-320, 325. Vgl. Sombart 1927-28, „Inhaltsverzeichnis“, 邦訳、「目次」。ゾムバルト「経済システム」構想は他方、アルトゥーア・シュピートホフ（1873～1957 年）によつて「経済スタイル」構想へと発展させられた（Spiethoff 1932, S. 75-78）。これらについては、原田 2001 および原田 2011 参照。なお、“Leben” という語の訳し方であるが、本稿第 I 節ではとくに人文学（ゲーテ）と密接に関連するザリーンの叙述において「生」と訳したが、ゾムバルトの場合には「生活」と訳した。しかし、ゾムバルトの場合も精神的側面を有するものとして“Leben”という表現が使われている。

27) Salin 1927, S. 318.

28) Salin 1928. 「形而上学者 Metaphysiker」はある別の人物（合理的・純粹理論を信奉する者）意味し、「直観的理論家 anschaulicher Theoretiker」はゾムバルト（あるいはザリーンそのもの）を意味している、と推測できる。ザリーンはまた 1933 年にもゾムバルトに宛ててその 70 歳の誕生日を祝う手紙を書いている。Vgl. Salin 1933.

ば、直観的理論の要点は、第 1 に、それが「総体認識の理論として、部分認識である古典・古典後の理論から区別される」ことであり、「直観的ないし歴史的な理論として、合理的ないしドグマ的な理論から区別される」²⁹⁾ ことである。したがって、プリミティヴな直観的理論は合理的理論の単なる反対物と見なされうるのであるが、高次元での直観的理論は合理的理論を包摂するのである。というのも、高次元での包括的な直観的理論の枠組みにおいては、合理的理論は「発見的な手段として」、つまり総体認識に役立つ部分認識としての役割を担うからである。とはいえ、合理的理論は「もしそれが独占的優位性や普遍妥当性を要求してくるのであれば排除され」³⁰⁾ なければならない。まさにこの関係において、ザリーンの直観的理論の構想は、メンガー経済学の限界効用論もヴェーバー社会学の理念型論も下位の部分認識のための理論として包摂するものなのである。

では、部分認識と総体認識は認識論的にどういう関係にあるのだろうか。1927 年論文の脚注でザリーンは「「部分認識」「総体認識」という概念は、過去数年における認識理論上の最も重要な成し遂げである、ベルリンで 1923 年に出版された哲学博士 E. ラントマン婦人の著作『認識の超越』に由来する」³¹⁾ と述べている。1929 年の『経済学史』第 2 版でも、初版にはなかった増補部分においてエーディト・ラントマン (1877～1951 年) への言及がなされている³²⁾。ザリーンが部分・総体認識との関連でラントマンの名を——つねにその著書の頁数の記載がないとはいえ——挙げるのは、彼のゲーテ賛美と同じく 1967 年の『経済学史』最終版まで続く³³⁾。『経済学史』第 2 版のザリーンは、直観的理論はなお完成されておらずその「最後の仕上げ」は「生きている世代」³⁴⁾ によってなされなければならないとするとともに、しかも直観的理論という経済

29) Salin 1927, S. 327.

30) Salin 1927, S. 331-332. 『経済学史』第 2 版では「手段 Mittel」に代えて「道具 Werkzeug」(Salin 1929, S. 102, 邦訳、245 頁) という語が同じ意味で使われている。

31) Salin 1927, S. 325.

32) Salin 1929, S. 55, 邦訳、132-133 頁。

33) Vgl. Salin 1967, S. 180.

34) Salin 1929, S. 102, 邦訳、246 頁。

学の構想はラントマンの認識論の構想という基礎のうえに「さらに組み立てていく」³⁵⁾ べきものと言う。

同じく『経済学史』第2版でザリーンは次のように述べている。

「経済学の内部での〔シュパン、ゾムバルト、ハルムスの各々が言う対立する両カテゴリーの〕区別が問題となる事実があるのであるが、その場合でも〔…〕純粋な両タイプは稀であり、混合的な両形態が多くあり、両者間の移行も自在になされるのであるから、論理的な対立から出発するのではなく、上位・下位の関係すなわち組み入れる関係から出発するようなグループ分けのみが考えられるのである。〔…〕こうした捉え方は、総体認識と部分認識とについてのエーデニト・ラントマンの認識理論上の区別に由来するのであり、それを基礎としてさらに組み立てていくとしても、次のことを確認しておくものである。すなわち、[1] 指向 Intention の向かう対象がどのランクに位置するかによって、[2] 捉えようとする部分対象ないし事柄がどの程度核心をつくものかによって、[3] 指向が全体性か部分性かどちらにかかわるかによって、認識の様々な程度 Grade と認識の様々な段階 Stufen が明らかになるのであり、その程度・段階に応じて高い認識が低い認識を包摂するなり、組み合わせて「説明する」なりして、理解可能にするのである。」³⁶⁾

この引用箇所は以下のように理解できる。ザリーンはこの箇所の直前で、対立的な2概念の区別について論ずる同時代の社会科学・経済学の様々な試みを紹介しており³⁷⁾、O. シュパン（1878～1950年）における「普遍主義と個人主義」、「ゾムバルトその他」³⁸⁾における「動態と静態」、ゾムバルトにおける「文化科学と自然科学」、B. ハルムス（1876～1939年）における「既形成態と向接合態」³⁹⁾が挙げられている。そのうえでザリーンが言うには、これらの区

35) Salin 1929, S. 55, 邦訳、132頁。

36) Salin 1929, S. 54-55, 邦訳、132-133頁。

37) その議論のもとになる記述はすでに1927年論文（vgl. Salin 1927, S. 332）に見られる。

38) この『経済学史』第2版においては、その節のタイトルで「ゾムバルトその他 Sombart u.a.」と書かれ、その本文でさらにケネーが挙げられているのみであるが、第3版（Salin 1944, S. 204-205）では、さらにシュムペーター、L. アモロソ、ワルラス、パレートなどが付け加えられている。

39) Salin 1929, S. 53-55, 邦訳、128-132頁。

別はいずれも事柄の特性をよく捉えたものであるが、そうした対立関係の両項を排他的に対立するかのよう捉えてしまう傾向にあるので、望ましい直観的理論としては充分なものではない。ちなみに、排他的な対立はしばしば低いレベルで生ずるものであるから、錯綜する社会的・経済的な諸現象は、そうした鋭い対立の構図のみをもってくるならば体系的・総合的に認識されえない。それに対して、直観的理論と合理的理論の対立は「上位・下位の関係すなわち組み入れる関係」となるものであつて、まさにそうした連関として捉えるにあたりラントマンの認識論が必要となる。この「上位・下位の関係すなわち組み入れる関係」の論理を含む彼女の認識論は哲学的なモデルを示しているのであるが、それは妥当な考察でもって彫琢することによって社会科学と経済学にも応用すべきである、とザリーンは考えたのである。

我々は以下でラントマンにフォーカスを当てていくとしても、その前に、ゾムバルトに関連したふたつの区別に対するザリーンの批判的な記述に、少し目配せをしておきたい。というのも、ザリーンはゾムバルトを賛美しているにもかかわらずゾムバルトを部分的に批判しているのだから、その批判にこそザリーンの独自の見解が見て取れるからである。そのひとつめの「動態と静態」の区別については、ザリーンはそれほど多く書いていないけれども、「抽象的な」経済理論でさえ「動態」の論理を内包しうることからしても「動態」か「静態」かを「最高度のメルクマールとしては使えない」としている。それよりも興味深いのは、ゾムバルトのもうひとつの区別「文化科学と自然科学」に対するザリーンの批判である。ザリーンはまず「本来の国民経済学は理解と解明という文化科学的な意思、ならびに本質認識という文化科学的目標をもつ」のだから「文化科学」の観点が非常に重要である、と述べる。しかしながらザリーンは、文化科学を「ニュートン以来の自然科学」の対立物として定義するリッカートの意味でのそれは「自然科学「の」本質認識」を説明できないとして、その区別に対して非常に批判的なのである。ザリーンによれば、「ゲーテの自然研究」は「ニュートンやダーウィンの諸法則よりも高度で持続する自然科学の形態」⁴⁰⁾を表しているから、ゲーテの自然研究の理念でもって文化科学・自然

40) Salin1929, S. 54.

科学の過度の区別を修正する必要があるのである。このザリーンの主張には、ゲーテの自然研究から示唆を得て生と思考の近代的な線引きを拒否しようとした年上の友人フリードリヒ・グンドルフの影響を見ることができる⁴¹⁾。

IV

さて、ここまで来れば、我々は『経済学史』第2版の上記の引用の内容をさらに明らかにするために、ラントマンの1923年の著書『認識の超越』のなかに入って行かなければならない。そこでラントマンは、こう述べている。「複数の知的な機能 Funktionen は、それら相互の関係において、段階をなす stufenförmig 建造物と見なされるのであり、そこではひとつの機能はつねに別の機能を前提としているとともに、第3のより高度な機能に寄与することを前提としている」⁴²⁾。ラントマンによれば、3つのまたは——文脈によっては（後述のように）——4つの「知的機能」言い換えれば「認識機能 Erkenntnisfunktionen」⁴³⁾が層をなしているのである。第1に、「最下」層には「感受 Empfindungen」⁴⁴⁾が、言い換えれば「表象 Vorstellungen」⁴⁵⁾または「感性的な知覚 sinnliche Wahrnehmung」⁴⁶⁾さらに言い換えるなら「感性的な印象 sinnlicher Eindruck」⁴⁷⁾が位置する。この種の認識機能だけは最下層にあるので、他の認識機能を前提としない。第2段階にある「概念 Begriff」はそうした「感受」や「表象」を前提とする。第3段階の認識機能は「判断 Urteil」であり、それは「それ自体に含まれる複数の概念に指向が向かっているものでなければ」⁴⁸⁾不可能である。

我々はこの第3段階が認識機能の最高段階であると見なしたいところであるが、ラントマンの叙述を詳しく読むと、それを超えた第4段階としての「規範

41) シェフオールト 2007, 122 頁。

42) Landmann 1923, S. 15.

43) Landmann 1923, S. 20.

44) Landmann 1923, S. 20.

45) Landmann 1923, S. 24.

46) Landmann 1923, S. 41.

47) Landmann 1923, S. 96.

48) Landmann 1923, S. 24.

Normen」ないし「理想 Ideal」が認識機能の「最高」⁴⁹⁾ 段階とされていることが分かる。この更なる区別は、ラントマンが対象は「すべてのそうした個々の判断が関連するところの規範」⁵⁰⁾ を形成するとしていることから、また表象・概念・判断・理想という並べ方が別の文脈から読み取れることから確認できるのである⁵¹⁾。もっとも、ラントマンが自分の構想が 3 段階的なものであるとしている箇所もあるため⁵²⁾、彼が第 3 段階（判断）と第 4 段階（規範ないし理想）をつねに明確に区別しているのか必ずしも明らかではないところもある。いずれにせよ、最高段階というものは——広義の判断（規範も含まれるそれ）であろうと判断から区別された規範であろうと——一番上に位置するので、「もはや別の段階への前提として役立つといったものではない」⁵³⁾ のである。

ラントマンにおいて「超越 Transcendenz」とは「陶酔や祈祷といった普通でない場合」を意味するのではなく、「意識がまったく普通に機能しているその領域において」⁵⁴⁾ 認識機能が「上と下へ」⁵⁵⁾ という両方向のいずれかに、言い換

49) Landmann 1923, S. 20, 24.

50) Landmann 1923, S. 17.

51) Vgl. Landmann 1923, S. 24.

52) Vgl. Landmann 1923, S. 16. ここで問題となるのが、ラントマンにおける「規範 Norm」ないし「理想 Ideal」の意味をどう解釈するかである。まずそれをマックス・ヴェーバーの「理念型 Idealtyp」のように理解することはできないであろう。もしもそう捉えたとすれば、詩的・美的な理想（例えばザリーンにおけるゲーテの機械制批判のようなそれ）は彼女の認識論の枠内に収まりえないからである。そもそもラントマンは、ロマン主義的なゲオルゲ=クライスのなかでヴェーバー的な没価値の法則をどのように評価していたのだろうか。これらにはなお詳細な考察が必要であるが、さしあたり、次のように述べておきたい。ラントマンは「そこからそれら〔諸対象〕を把握するところの視点 Blickpunkt」「核 Kern」「中心 Mittelpunkt」（Landmann 1923, S. 122-125）があるとと言うのだが、それらは上記の規範・理想とどのように関係付けられているのか、という問題である。ラントマンは「核」という表現でもってヴェーバーの国家把握を批判していることから、彼女の「核」概念がヴェーバーに対抗する観点を示唆していることが分かる（Landmann 1923, S. 119. また本稿の注 59、62 参照）。ラントマンの「核」概念は、それはヴェーバーのような推論のための仮説的モデルではなく、認識との関連で、現実に存在するものの本質を言っているのである。

53) Landmann 1923, S. 20, vgl. auch S. 107.

54) Landmann 1923, S. 24.

55) Landmann 1923, S. 16, 23.

えれば「総対象 Gesamtgegenstand」または「部分対象 Teilgegenständen」⁵⁶⁾へと動くことを意味する。ラントマンは意識が外の認識対象へと向かうことを「指向 Intention」と呼ぶのであるが、それは当時の主導的な哲学者であったフランツ・ブレンターノ（1838～1917 年）とその元弟子エトムント・フッサール（1859～1938 年）の概念に依拠してのことである。とりわけフッサールについては、上述のような認識構造の捉え方が「フッサールにおいては非常に豊かで説得力のある叙述において」⁵⁷⁾論じられているとして、賞賛されている。

さらに、上掲のザリーンの引用の後半部分に見られた、1. 対象の「ランク Rang」、2. 部分対象や事柄の「核心 Kernhaftigkeit」、3. 「指向」の向かうのは「全体性 Ganzheit か部分性 Teilhaftigkeit か」、といった点もラントマンの認識論との関連でより良く理解することができる。

第 1 に、彼女の構想する認識の全体構造は「段階的」なものであることからして、ある認識がどのレベルでなされているかを考えることが必要となる。そうでなければ、ある低次元での認識を高度な認識と見なしけたり、逆に高度な認識を低次元な認識と見なしけしてしまうからである。

第 2 に、対象全体にとって核となるような特別の重要性のあるものに価値を置かなければならない、ということである。ザリーンが同時代の研究者らに注意を喚起するのは、そうした「核心」への配慮がなければ社会的・経済的な諸関係を厳密に認識することができない、ということである。彼がそれとの関連でラントマンの『認識の超越』のなかで注目していたと思われる箇所は、「実在体における構造的な区別」と題された、この哲学書で例外的に多く社会や国家について言及している節⁵⁸⁾である。彼女が言うには、機械においては機械の機能がその「核」であって、他の個別部分——例えばレバーやツマミなど——を「核」としてもつわけではない。つまり機械の本質はその機能からして認識される。同じく「教会」というものの核は宗教であって、それは見えないものである。同様に、社会的な諸組織も通常は、目に見え

56) Landmann 1923, S. 30.

57) Landmann 1923, S. 25, vgl. auch 30-31.

58) Landmann 1923, S.115-125.

ない事柄を核としてもつ。「あらゆる団体、あらゆる経済組織、すなわち市場、証券取引所、消費者団体、また利害団体——例えばハンザ同盟など——は実在体 Substanzen であり、具体的な全体であるが、その核は見えるものにあるのではなく、精神的なものに、つまり機能「いかに機能するかということ」に、目的に、課題に存するのである」⁵⁹⁾。すなわち、現実にある「実在体」を厳密に認識するためには、見えない事柄・関係においてその核を見出すように努める必要があるのである。

ラントマンは同じ節で、そうした視角から「国家」を次のように定義する。「ごく一般的に言うならば、国家とは、特定の諸個人が互いに取り結ぶ社会契約を意味するのではなく、そうした諸個人があつた結束 Bündnis によってつなぎ合わされた統一的な全体を意味するのである。複数の結合、複数の行為、これらこそが国家の核をなす事柄関係 Schverhalt を表わしうるということであつて、国家それ自体なるものを表わすことなどありえない。[...] 国家には領土があり、これこれの人数の国民があり、また人間間の現実の関係から主権もありえて、それが大きかったり小さかったりし、戦争で勝つこともあるが負けることもありうる、というものではないだろうか。国家自体は国民の諸行為だけでは言い表わせないし、憲法で表現される契約だけでも言い表せないものであつて、そうではなくて、国家とは人間・領土・憲政体の 3 つからなる統一体なのである」⁶⁰⁾。こうした議論のなかでラントマンはオットー・フォン・ギールケ (1841~1921 年)⁶¹⁾ に肯定的に言及して、社会契約説から距離を置くとともに、マックス・ヴェーバーの社会学的な国家の定義からも距離を置く。ラントマンによれば、ヴェーバーは国家に「もっぱら個々人による社会的行為の特定の成り行きのみ」⁶²⁾ を見ようとしただけなのである。

59) Landmann 1923, S. 122. またヴェーバー「理念型」との関連で本稿の注 52 を参照。

60) Landmann 1923, S. 119.

61) Vgl. Landmann 1923, S. 120. ただし、ここでラントマンはギールケの国家論を詳しく論じているわけではない。なお、ギールケの団体主義的国家論に関する、わが国での最近の研究として、遠藤 2007 がある。

62) Landmann 1923, S. 119. ここではヴェーバーの名前のみがその著作などの言及なしに括弧で記されているのであるが、この引用は明らかにヴェーバーの『社会学の基礎概念』での一節 (Weber 1921, S. 553, 邦訳、23 頁) に対応している。ヴェーバーのこの箇所を見付け出して筆者に示してくれたズザネ・リュウレ氏に、お礼申し上げる。

第3に、ザリーンの「指向が全体か部分かのどちらにかかわるか」という表現は、ラントマンの「全体指向 Totalintention」と「部分指向 Partialintentionen」の相違と関係についての議論に対応する。「全体指向」とは、「意識がその諸機能総体において自らを総括し、意識に与えられた諸対象——諸指向の諸対象——すべてを統合する〔高度な〕指向であり […]、すべての諸指向の超越が完結する〔高度な〕指向である」。それに対して「部分指向」は「ある種の断片的な性格」を有するのであるが、そうであるがゆえに「それは自らの特殊な対象を超えて、総体対象を狙うものである」。というのも「部分志向とは最高の目的に役立つような諸要素 Elemente と諸道具 Instrumente を表わしている」⁶³⁾ ものだからである。したがって、ラントマンの言う「上位・下位の関係」⁶⁴⁾ とは、部分指向が「道具」として高度な目的に役立つことなのである。このシェーマこそ、ザリーンによって定義付けられた合理的理論の役割に、すなわち「発見的な手段として」⁶⁵⁾ 総体認識に役立つという役割に、対応するのである。

V

すでに見たように、ザリーンは『経済学史』第2版で、現実の諸関係においては「純粋な両タイプは稀であり、混合的な両形態が多くあり、両者間の移行も自在になされる」⁶⁶⁾ ということを強調している。この見地がラントマンの構想と対応していることは、総体認識への部分認識の包摂という彼女の論理に関連してよりも、低次の認識と高次の認識とはけっして単に上から下へと支配する階層的なものではなく高次の認識も低次の認識によって修正される可能性があるとする彼女の議論との関連で、捉えることができるのである。

ラントマンは、「総体認識は抑制的であり、補完的であるから、また（間違ったことへと、あるいは正しいことへと）それ〔部分認識〕に対して修正するように korrigierend 作用する」⁶⁷⁾ と述べている。彼女は別の表現で、「補完、修

63) Landmann 1923, S. 30-31.

64) Landmann 1923, S. 31. ザリーンにおける「上位・下位の関係」と同様の表現については、vgl. Salin 1929, S. 55, 邦訳 132 頁（本稿注 36）。

65) Salin 1927, S. 331, 331（本稿注 30）。Vgl. Salin 1929, S. 102, 邦訳、245 頁。

66) Salin 1929, S. 55, 邦訳、1323 頁。本稿注 36 参照。

67) Landmann 1923, S. 94.

正、抑制を我々は部分認識に対する総体認識の機能として見たが、それらはまた有機体が個々の器官に相対する規制的な機能としてもよく知られている」⁶⁸⁾とも書いている。

ここで「間違ったことへと […] 修正するように」という可能性もあると読みうることに、注目してほしい。より高度な認識レベルによる「感性的な取り違い」の例として、ラントマンは「窓でハエがブンブンと音を立てているのを道路での車の騒音とってしまう」⁶⁹⁾ 場合を挙げている。こうした取り違いは、微細な感覚的な印象が既存の高度な認識によって修正されたことによって生ずるのであり、いつも体験する現象へと——すなわち多分そうであろうと思われることへと——遡及することによって生ずるのである。しかし「その部分対象の特性なるものはそうした変形——部分対象が総体対象での意味付けによって被らされた〔認識上の〕変形——にもかかわらず元のままで留まっているのだから、総体認識は、その土台である部分認識のみから歩みを進めるなら、真実へと若返ることができる」⁷⁰⁾ とラントマンは言う。この関係において、総体認識自身が部分認識に助けられてもう一度、自ら真理へと修正することになる。認識主体はハエが窓ガラスでブンブンと音を立てていることが分かるようになり、自分の誤りに気付いて、それを訂正する。

この総体認識が「若返ること」が可能なのは、部分対象が「元のままで」留まっている必要がある。これを念頭において、我々は、ラントマンが「部分認識に対する総体認識」を生命体としての「有機体が個々の器官に相対する」⁷¹⁾ 関係になぞらえていることを理解することができる。彼女は、「有機体全体とその諸部分との間の […] 本来の緊張関係」というものは「総体認識と諸部分対象との間の関係についての […] 唯一の類似物」であるとしている。「緊張関係 Spannung」というのはこうである。「ひとつの有機体のなかの個々の諸器官」は一方で、「それらが〔単なる〕全体の諸部分として成しうる

68) Landmann 1923, S. 106.

69) Landmann 1923, S. 95.

70) Landmann 1923, S. 96, vgl. auch S. 100.

71) Landmann 1923, S. 106 (本稿注 68).

諸作用とは異なった、しばしばより大きな諸作用を成す能力がある」。諸器官が生きた繋がりをもつことこそ、有機体の機能にとって不可欠なのである。というのも、生きた諸器官のみが有機体の若返りに貢献しうるからである。他方、「しかし一器官の肥大は有機体を弱める」ので、「諸部分の作用の種類と量について」は「全体の目的」⁷²⁾ が決定しなければならない。望ましい状態は、「総体対象に接する——というか下からそれを思う——全体指向においても、その全体指向の土台となる部分諸対象は不可侵のままで」置いておく状態であって、それは「頭に対して両脚がなお保持されているといった」⁷³⁾ 生命体の状態と同じことなのである。

ここから「多様性の保持」という主張がなされる。「内的関係の緊密性や基礎的諸関係の多様性といったものをすべて傷つけずに意識に収めていれば、それぞれの認識対象の特性は新たな諸関係においても存続していくのである」。言い換えるなら、「部分諸対象が総体対象において溶けて（消失して）いない」ことが重要なのであり、「前者が後者のなかにあってもそれ自体として残っている」状態であることが必要なのである。あるいはもっと日常的な例で言えば、意識というものは「恐るべきレセプトによる調合のために、種々雑多な添加物を極端に混ぜ合わせ・煮込んだ末にできた、わけの分からないイカサマ料理」であってならないのであり、「それ〔総体認識の対象〕を基礎付けるこうした部分諸対象が、そのなかにあっても、化学薬剤たっぷりの浴槽で溶けてなくなったり・混合されたりした状態になっていないことである」⁷⁴⁾。

この認識論のシェーマを社会の見方として捉えるなら、それが 19 世紀初頭のドイツ・ロマン主義の世界観なかでもアダム・ミュラー（1779～1829 年）の国家・経済観と類似していることが分かる。ミュラーのそれも社会を有機体と見なすことによって構想されており、彼はフリードリヒ 2 世の集権主義に反対して分権主義を「無限の多様性」として提唱し、化学のような性質をもつ近代の社会形成とその論理を、社会の「より良い状態」を「坩堝やレトルト」のな

72) Landmann 1923, S. 106.

73) Landmann 1923, S. 105.

74) Landmann 1923, S. 104-105.

かで「完全に溶かされた世界から」⁷⁵⁾ 作ろうとする企てとして非難した。もちろん我々は両構想の、異なった歴史的條件に由来するがゆえの相違を無視してはならないが、その類似性が我々に向かわせるのは、ロマン主義の思想がラントマンやザリーンないしゲオルゲ=クライスの思考様式に、さらにはシュテファン・ゲオルゲ自身の思想に流れ込んでいたのではないかという興味深い問いである。この問題を明らかにすることは思想史的に重要であるが、残念ながらここではさらに追求する余裕はない。ひとつのポイントは、クライスで強い影響力のあったグンドルフのゲーテとロマン主義に関する諸研究がどうであったかであり、それを含めてさらなる分析が必要とされるであろう⁷⁶⁾。

VI

『経済学史』第 2 版のザリーンによれば、経済学における合理的理論の形成における主要な問題点は、そうした理論が「無時間的な」(時間・時代を超越した)性格をもち「無時間的な経済なるものの法則なるもの」⁷⁷⁾であることを自ら要求してしまうことである。すなわち、経済というものはそもそも無時間的に捉えうとする見地から、それを法則化することこそ理論の名に値する、といった主張をすることである。このことは、初期にはとりわけデイヴィッド・リカードウ (1772~1823 年) に当てはまるし、ザリーンに近い過去ではカール・メンガーやオイゲン・フォン・ベーム=バヴェルク (1851~1914 年) などに当てはまる、とザリーンは言う⁷⁸⁾。ザリーンがこの問題に注意を喚起しているのは、ラントマンの名前を本文でも脚注でも記しているまさにそのページである。したがって、空間と時間から独立した法則性の認識というものがもつ問題性についてラントマンの著書『認識の超越』ではどのように論じられているか、探ってみることである。

ラントマンは、具体的な対象の認識において時間的な次元が無視できないこ

75) Müller 1810, S. 39, 153. Vgl. Huber 1965, S. 48-70; 原田 2002, 138-139 頁。

76) Vgl. Salin 1954, S. 80-81 (本稿注 21); 上山 2001, 30-39 頁。

77) Salin 1929, S. 55.

78) Vgl. Salin 1929, S. 55-58 (第 2 版において加筆された箇所), 96.

とについて、その著書の2か所で、それぞれ別の研究者の作品から引用しつつ述べている。ひとつめはパウル・フェルディナント・リンケ（1876～1955年）の論文からの次のような引用である。「あらゆる経験的な所与の対象」は「ある非常に本質的な点にあるときに、思い描かれているものなのであり、[...]その点とは、その対象がふたつの構成要素の結果として、言い換えればふたつの座標での交点として見なされる点なのであるが」、その「ふたつの座標」とは「無時間的な理念」と「個別化し、その理念を時間的に固定する要因」⁷⁹⁾とである。したがって、リンケによれば、具体的な対象を認識するには「無時間的な理念」と「その理念を固定する要因」との両者を考慮に入れなければならないのである。もうひとつの引用はフッサールからの、「色付け Färbung」と「色 Farbe」の違いに関するものである。「色付けはその場所とその時間をもっており、広がっていくものであり、その強さをもつし、生成しかつ過ぎ去る。種 Spezies としての色に当てはめてみても、これらの述語はまったく無意味である」⁸⁰⁾。具体的な行為としての「色付け」は、それ自体の場所的・時間的な「述語」をもつが、「種としての色」は述語をもたないのである。

ラントマンがこれらの引用との関連で何度も強調するのは、「具体的な対象における一要素として普遍的なものを承認する」⁸¹⁾べきであるということである。普遍的なものは未規定なので、「具体的な対象においては普遍的なものの未規定性にひとつの規定性が着せられるのである」⁸²⁾。その結果、具体的な対象それ自体は時間的な（また場所的な）規定性のみならず、普遍的なものの未規定性をももつことになり、この両者ともその具体的な対象の要素だと言える。規定性と未規定性のいずれもが具体的な対象の要素なのである。このような関係においては、具体的な——したがって多かれ少なかれ感覚的に見られる——対象は、2側面を有するがゆえに重要な役割を担っていることになる。未

79) Landmann 1923, S. 98; Linke 1917, S. 202. ラントマンは誤って「1916」と記しているが、正しくは1917年である。

80) Landmann 1923, S. 100; Husserl 1913, S. 155, 邦訳、第2巻、172頁。

81) Landmann 1923, S. 99, vgl. auch S. 96, 98, 102. S. 98では「特殊なものにおける普遍的なものの内在」とも言われている。

82) Landmann 1923, S. 100.

規定性でもって特徴付けられる「種としての色」という概念は本来ならば——認識段階のシェーマからすれば——「述語」付きの認識よりも抽象度が高い位置にあるはずなのだが、まさにその上下関係ゆえ、述語付きの（下位の）認識の方がより多くの認識を内に含んでいることになる。ザリーンにとっては、ここで具体的な対象の認識が前面に出ていることは興味深かったであろう。というのも彼は、国民経済の個性すなわち空間（地理）的・時間（時代）的な具体性を強調するドイツ歴史学派の経済学を、洗練しつつ継承しようとしていたからである。国民経済その他の具体的な・生きた経済現象（「色付け」）を理解しようとするなら、普遍的とされる合理的理論による認識（「未規定性」としての「色」）でさえ、「その場所とその時間」（「規定性」）の認識との噛み合わせがなければ意味がない。そうすると、合理的理論による認識も時間・場所の認識とならぶ一要素ということになる。

ここに述べた、規定性・未規定性の両側面を含んだ具体的対象の重要性という議論は、ラントマンの認識段階論との関連では、こう捉えられる。非規定的な要素と規定的な要素の両者を兼ね備えているものとして具体的対象が統合的に把握されたとき、認識が第 1 段階の「感受」「表象」と第 2 段階の「概念」とを超えて第 3 段階の「判断」に至っている、ということである。というのも、最初の 2 つの段階では、感覚的な（規定的な）認識である「感受」「表象」と、一定の一般化がなされた（非規定的な）認識である「概念」とが相互にやり取りするとしても、まだ未統合である。それが第 3 段階としての「判断」において、統合された認識となる。さらに、そうしたいわば客観的な認識としての「判断」を基礎にして、とるべき方向としての「規範」「理想」といった価値判断が示される認識が第 4 段階である。このようにラントマンの認識段階論を捉えると、それとザリーンの直観的理論との関係はどうなるのだろうか。ザリーン自ら明確に示しているわけではないが、おおよそ次の図のように捉えられると思われる。

〈ラントマンにおける認識の階梯とザリーン「直観的理論」による経済認識の階梯との対応関係〉

ラントマンにおける認識の階梯		ザリーン「直観的理論」による経済認識の階梯	
第 4 (3') 段階	規範 Norm、理想 Ideal	第 3 段階 高次での「直観的」認識	第 2 段階での統合的な認識を基礎として、「規範」「理想」(倫理、社会正義、美的・詩的理想)といった価値判断が認識されている。
第 3 段階	判断 Urteil	第 2 段階 包括的な「直観的」認識	歴史的に育まれた文化や慣習の貫徹する社会・政治諸制度という「超経済的な容器」に納まっている全体として、国民経済が認識される。ここでは、「直観的」認識と「合理的」認識との単純な対立は解消され、高度な前者(総体認識)による後者(部分認識)の包摂となる。
第 2 段階	概念 Begriff	第 1 段階 低次での「直観的」認識	素朴な「直観的」認識は単純な「合理的」認識と対立して、併存する。
第 1 段階	感受 Empfindung、表象 Vorstellung、 感性的な知覚 sinnliche Wahrnehmung		

表においてザリーンの第 2 段階で記しておいた『経済学史』第 2 版での「超経済的な容器」という表現は、注目に値する。そこでザリーンは「感性を含む理論としての直観的理論は通例、歴史を含む理論であり——意識するしないにかかわらず——歴史的・政治的な要素を包摂しているものであり、正しく言えば、直観的理論は経済〔狭義での経済〕をその中間的な性格からして、まさに超経済的な容器überwirtschaftliches Gehäuse のなかにあるものとしてのみ見るのであり、考えるのである」⁸³⁾と述べている。このような意味で、ザリーンの言う直観的理論は、現代においては、通例「理論」とされる狭義の経済理論ではなく、社会学などで言われるような「社会理論」のようなもので、かつ大規模なもの——それには狭義の経済理論が「部分認識」の「道具」として包摂される——であることが分かる。またザリーンの第 3 段階は、「学問を超えたところにある生の重要性」（本稿第 I 節参照）と彼の言った価値判断が位置することになる。それは、学問的・客観的に明らかにする第 2 段階の上にあって、進むべき理想を示すものである。

ところで、「超経済的な容器のなかにあるもの」として経済現象を捉えるのと同様の構想が、環境倫理の観点から新しい経済学を模索する際に提唱されていることは興味深い。現代経済学における環境問題の取り扱い是一般に外部不経済の問題として論じられるが、その処理の仕方の限界を超えるためには環境の問題をもはや外部として捉えるのではなく、それに関連する社会関係の総体を含めた「容器の経済学」という広義の経済学が望まれるというのである⁸⁴⁾。しかも、そうした観点からすれば目指すべき環境倫理が示される必要があるのだから、最高位に規範・理想を据えることは、現代的な視点からも注目に値するであろう。ザリーンの場合、規範・理想に美的・詩的な理想も含まれることは、論理化しにくい人文学的・美学的な理想の社会科学への社会科学化という困難を含むけれども⁸⁵⁾、今日、景観といった計測しにくい「美的価値やレクリエーションのための価値」も環境問題として経済学が考慮すべき状況にあるな

83) Salin 1929, S. 55, 邦訳、134 頁。

84) 宮本 1994 年、48-51 頁参照。

85) シェフォールト 2007、122-123 頁。

かで⁸⁶⁾、逆に、それがザリーンの構想の強みとなってくる可能性がある。

ちなみに、ゲオルゲ＝クライスに属したラントマンやザリーンらが心に抱いた、環境の理想と行き過ぎた機械文明への批判といったイメージとして、彼らの愛唱した詩の数々が収められたゲオルゲの詩集『盟約の星』（1914 年）からふたつ紹介したい。

ひとつめは、そよ風の吹く爽やかな朝と清涼な川の流れとに例えられる自然の恵みのなかで、人々が質実でクリエイティヴな「美しい生活」を幸せに営む情景が描かれている詩である。

どんな奇跡について、朝の大地は微笑んでいるのだろうか。

まるで大地の初めての日のようじゃないか？ 驚いて歌うってことを、
目覚めたばかりの世界について、風がやってるんだ。

昔からある山々の形は変わっていないよ。

そして幼心の庭みたいに、花が揺れている …。

流れは川を飛び出して、そして巻き込んでいった、

流れのなかでふるえている銀色が、何年もたまったホコリをすべて。

創造ってものが、恵まれた境遇にいるみたいに、身をふるわせている。

道行く人がいるけど、その頭は、

見たことのないような高貴なもので飾られている。

大きな光が大地のすみずみまで注ぎ込まれている …。

光の伸びているところに行く人たちがみんな、幸せになりますように！⁸⁷⁾

もうひとつは、「科学技術のなれの果て」の機械的建造物によって逆に人間が苦しめられている状況のなかで、止められなくなってしまったそれに対して、たとえ少数人数であっても——自分たちが「狂気」と見なされようが——「聖なる戦い」でもって挑もうではないか、と激しく呼びかける作品。まるで、福島原発問題を先取りしているかのようである。

86) 岡 2012、185 頁；Kapp 1950, p.243, 邦訳、265 頁参照。

87) George 1914, S. 82, 邦訳、267 頁。シェフォールト 2007、109 頁参照。

おまえたちは節度や限度を超えてまで建築しているぞ、
「高度なものをもっと高度にもできる！」などと言うが、どんな工夫も、
どんな支柱も修繕もぜんぜん役に立たず…、その建物は揺らいでいるぞ。
そして、おまえたちは科学技術のなれの果てに天に向かって叫ぶのだ、
「どうしたらいいんだ？ 自分たちの瓦礫のなかで窒息してしまう、
自分たちのオバケ建造物のために頭がへろへろになってしまう」
天があざ笑って言う、停止するにも、投棄するにも、もう遅い！
聖なる狂気が多数を打倒しなければならない
聖なる伝染病が多数を襲わなければならない
聖なる戦いが多数を制圧しなければならない⁸⁸⁾。

VII

さらにラントマンの次の主張も考察しておくべきであろう。「我々は、総対象のことを現実体 Substanz と呼んでいる」のであり、「現実体とは、諸特性を有するものとしてはあらゆる部分諸指向でもって捉えられるし、その統一性を有するものとしては全体指向によってのみ捉えられるものである。すなわち、現実体とは、感性的に現れるとともに非感性的な本質をとまなつてもいるのであつて、現実体は、判断において無数の諸特性が挙げられうるけれども、同時にひとつのものなのである」。言い換えるなら、「感性的に」現れている対象が (a) 「部分諸指向」でもって把握できる独自の「諸特性」を有し、かつ (b) 「全体指向」でもって把握できる「統一性」を有し、それによって (c) 「判断」に値する「非感性的な本質」を有するならば、それはひとつの「総対象」、つまり「総認識」⁸⁹⁾ のための「対象」なのである。この定義では、対象が大きいか小さいか、より大きな対象の部分であるかどうか、といったことはどちらもよいことになる。そのため、大きい対象の総体認識と併存して、あるいは大きい対象の総体認識のなかに、別の小さい対象の総体認識というものがあつてもよいのである。このようにして、数々の総認識が縦方向に並ぶことになる。そ

88) George 1914, S. 31, 邦訳、252-253 頁。手塚富雄 1960、338-339 頁参照。

89) Landmann 1923, S. 89- 90.

のことを部分認識の総体認識との関係と呼ぶことができるのであり、その部分認識でさえ小さな総体認識であるということでそうなのである。

ラントマンを高く評価するザリーンが、総体認識を単層的な統一性を有するものとしてではなく、縦方向の並びをもつもの、つまり複数の部分諸対象ごとの小さい総体認識の数々——しかも多層にわたるそれ——によって組み立てられているものとするラントマンの議論を正しく認識していたことは、容易に推測できる。このことは、ザリーンが 1927 年論文で賞賛している（本稿第Ⅱ節参照）ゾムバルトの『高度資本主義』と『経済生活の秩序』も複数の主要部分とそのそれぞれの下位部分の分析からなっていた縦型（および同一レベルでの並列関係）の構成と一致することからすれば⁹⁰⁾、ザリーンがゾムバルトとラントマンの両者を同時にそうした点で高く評価したことが分かるのである。ただし我々は、ザリーンのゾムバルト評価には、それへの留保として「ゾムバルトの言葉遣い Terminologie は、部分認識を総体認識と混同するようないわゆる認識理論の古い状態からのみ出発しているので、合理的・論理的な諸理論に余地を与えることができなかったよう」⁹¹⁾との苦言があったことを忘れてはならない。この連関からして、我々は、とりわけ 1920 年代後半のザリーンの企図が理解できるのである。つまり、ザリーンは、包括的で体系的にも優れているが認識論的に不十分であったゾムバルトの構想を、最新の哲学的研究を踏まえたエーディト・ラントマンの認識論をベースにして修正しつつ発展させようとしたのである。そして、ザリーンはそれを通じて、シュモラーによって軽視されてしまった、理論と歴史の結合という歴史学派の——かつてクニースによっても提唱されていた——課題をなしとげるという目標を、高度な形で実現しようとしたのである。

90) 原田 2011、参照。

91) Salin 1927, S. 325.

参考文献

〈欧語文献〉

- George, S. [1914] : *Stern des Bundes* (1914), *Gesamt-Ausgabe der Werke: Endgültige Fassung*, 18 Bde. (in 15 Bde.), Berlin 1927-33, Bd. 8. 富岡近雄訳「盟約の星」、富岡訳『ゲオルゲ全詩集』郁文堂、1994 年。
- Goethe, J.W. [1821] : *Wilhelm Meisters Wanderjahre* (1821), In: *Goethes Werke*, Bd. 8, Hamburg 1950, 登張正實訳『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』、『ゲーテ全集』第 8 巻、潮出版社、1981 年。
- Huber, E.R. [1965] : *Nationalstaat und Verfassungsstaat: Studien zur Geschichte der modernen Staatsidee*, Stuttgart.
- Husserl, E. [1913] : *Logische Untersuchungen*, Bd. 2, Teil 1, 6. Aufl. (unveränd. Nachdr. der 2. Aufl. 1913) Tübingen 1980. 立松弘孝他訳『論理学研究』全 4 巻、みすず書房、1968-76 年。
- Kapp, K.W. [1950] : *The Social Costs of Private Enterprise* (1950), *Intellectual Legacy of Management Theory*, co-ed. by D.A. Wren and T. Sasaki, Series 10 (Social Issues of Management), Vol.2, London 2010. 篠原泰三訳『私的企業と社会的費用——現代資本主義における公害の問題』岩波書店、1959 年 (第 3 刷、1967 年)。
- Knies, K. [1883] : *Die politische Oekonomie: Vom geschichtlichen Standpunkte*, Braunschweig.
- Landmann, E. [1923] : *Die Transcendenz des Erkennens*, Berlin.
- Linke, P.F. [1917] : Das Recht der Phänomenologie: Eine Auseinandersetzung mit Th. Elsenhans, In: *Kant-Studien*, Bd. 21, 1917.
- Menger, C. [1884] : *Die Irrtümer des Historismus in der deutschen Nationalökonomie*, Wien 1884, Nachdr., Aalen 1966. 福井孝治・吉田昇三訳 (吉田昇三改訳)『経済学の方法』日本経済評論社、1986 年。
- Müller, A.H. [1810] : *Ueber König Friedrich II. und die Natur, Würde und Bestimmung der Preussischen Monarchie: Oeffentliche Vorlesungen, gehalten zu Berlin im Winter 1810*, Berlin 1810.
- Roscher, W. [1843] : *Grundriß zu Vorlesungen über die Staatswirthschaft: Nach geschichtlicher Methode*, Göttingen. 山田雄三訳『歴史的方法に拠る国家経済学講義要綱』岩波書店、1938 年。
- Salin, E. [1923] : *Geschichte der Volkswirtschaftslehre* (=Enzyklopädie der Rechts- und Staatswissenschaft, Abtl. Staatswissenschaft, hrsg. v. A. Spiethoff, Bd. XXXIV), 1. Auf., Berlin.

原田：ゲオルゲ＝クライスにおける哲学者 E. ラントマンから経済学者 E. ザリーンへの影響

- [1927] : Hochkapitalismus: Eine Studie über Werner Sombart, die deutsche Volkswirtschaftslehre und das Wirtschaftssystem der Gegenwart, In: *Weltwirtschaftliches Archiv*, Bd. 25, 1927.
- [1928] : Brief von Salin an Sombart vom 11. April 1928, Akt-Nr. NL 114. E. Salin Fb 2621, In: Salin-Archiv, UB Basel.
- [1929] : *Geschichte der Volkswirtschaftslehre* (=Enzyklopädie der Rechts- und Staatswissenschaft, Abtl. Staatswissenschaft, hrsg. v. A. Spiethoff, Bd. XXXIV), 2. neugestalt. Aufl., Berlin 1929. 高島善哉訳『国民経済学史』三省堂、1935 年。
- [1933] : Brief von Salin an Sombart vom 17. Januar 1933, Akt-Nr. NL 114. E. Salin Fb 2624, In: Salin-Archiv, UB Basel.
- [1944] : *Geschichte der Volkswirtschaftslehre*, 3. erw. Aufl.
- [1954] : *Um Stefan George: Erinnerung und Zeugnis*, 2. Aufl. München, Düsseldorf.
- [1967] : *Politische Ökonomie: Geschichte der wirtschaftspolitischen Ideen von Platon bis zur Gegenwart*, 5. Aufl. der Geschichte der Volkswirtschaftslehre, Tübingen, Zürich.
- Schefold, B. [1992] : Nationalökonomie als Geisteswissenschaft – Edgar Salins Konzept einer Anschaulichen Theorie, In: *List Forum für Wirtschafts- und Finanzpolitik*, Bd. 18, Heft 4, 1992.
- [2005] Die Welt des Dichters und der Beruf der Wissenschaft, In: B. Böschstein, J. Egyptien u.a. (Hrsg.): *Wissenschaftler in George-Kreis*, Berlin, New York. 横道誠・恒木健太郎訳「〈翻訳と解題〉詩人の世界と学問の使命——シンポジウム論集『ゲオルゲ・クライスの学者たち』より」(上)(下)、京都大学『社会システム研究』第 9 号、2006 年、第 10 号、2007 年。
- Schmoller, G. [1870] : *Zur Geschichte der deutschen Kleinindustrie im 19. Jahrhundert: Statistische und nationalökonomische Untersuchungen*, Halle.
- [1874] Offenes Sendschreiben an Herrn Professor Dr. Heinrich von Treitschke über einige Grundfragen des Rechts und der Volkswirtschaft, In: *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. 23, 1874. 戸田武雄訳『法及び国民経済の根本問題』有斐閣、1939 年。
- [1884] : Studien über die wirtschaftliche Politik Friderichs des Großen und Preußens überhaupt von 1680-1786, In: *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 8. Jg. 正木一夫訳『重商主義とその歴史的意義』未来社、1971 年 (ただし全訳ではない)。

Sombart, W. [1925] : *Die Ordnung des Wirtschaftslebens*, Berlin 1925. 向井利昌・吉筋知之訳『経済生活の秩序』(I)～(III)、神戸学院大学『経済学論集』第 16 巻第 3 号、1984 年、第 16 巻第 4 号、1985 年、第 17 巻第 1 号、1985 年(ただし全訳ではない)。

—— [1927-28]: *Der moderne Kapitalismus*, Bd. 3(=*Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus*), in zwei Halbbde., München, Leipzig. 梶山力『高度資本主義』I, 第 3 刷、有斐閣、1941 年(邦訳は I しか出ておらず、全訳ではない)。

Spiehoff, A. [1932] : Die Allgemeine Volkswirtschaftslehre als geschichtliche Theorie: Die Wirtschaftsstile, In: *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reiche*, 56. Jg., II. Halbbd.

Weber, M. [1904] : Die „Objektivität“ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis (1904), In: J. Winckelmann (Hrsg.): *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre von Max Weber*, 4. Aufl., Tübingen 1973. 出口勇蔵訳「社会科学および社会制作の認識の「客観性」」、出口勇蔵・松井秀親・中村貞二訳『社会科学論集』河出書房新社、1982 年。

—— [1904-05] : Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus (1904-05), In: *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie von Max Weber*, 7. Aufl. Tübingen 1978. 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1988 年。

—— [1917] : Der Sinn der „Wertfreiheit“ der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften, In: J. Winckelmann (Hrsg.): *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre von Max Weber*, 4. Aufl., Tübingen 1973. 中村貞二訳「社会学・経済学における「価値自由」の意味」、出口勇蔵・松井秀親・中村貞二訳『社会科学論集』河出書房新社、1982 年。

—— [1921] : Soziologische Grundbegriffe (1921), In: J. Winckelmann (Hrsg.): *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre von Max Weber*, 4. Aufl., Tübingen 1973. 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店、1972 年。

〈日本語文献〉

上山安敏 [2001] : 『神話と科学——ヨーロッパ知識社会 世紀末～20 世紀』岩波書店。

遠藤泰弘 [2007] : 『オットー・フォン・ギールケの政治思想——第二帝政期ドイツ政治思想史研究序説』国際書院。

岡敏弘 [2012] : 「経済学は環境をどう捉えてきたか——ピグー、制度派、エントロピー」、経済学史学会／井上琢智／栗田啓子他編『古典から読み解く経済思想史』、ミネルヴァ書房。

原田：ゲオルゲ・クライスにおける哲学者 E. ラントマンから経済学者 E. ザリーンへの影響

シェフォールト、B. [2007]：(原田哲史訳)「エトガー・ザリーンと彼の「直観的理論」の構想——戦間期において」、福島大学『商学論集』第 75 巻第 2 号、2007 年（英語の原文はそのままの長さの“longer version”としては公刊されていないが、縮約版“shorter version”が『経済学史学会年報』第 46 号、2004 年に掲載されている）。

田村信一 [1993]：『グスタフ・シュモラー研究』御茶の水書房。

手塚富雄 [1960]：『ゲオルゲとリルケの研究』（1960 年）、『手塚富雄著作集』第 4 巻、中央公論社、1981 年。

原田哲史 [2001]：「歴史学派の遺産とその継承——ザリーンとシュビートホフの「直観的理論」」、『思想』No. 921、2001 年。

——— [2002]：「E. ザリーン『経済学史』の諸版について」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』No.22、2002 年 3 月。

——— [2002]：『アダム・ミュラー研究』ミネルヴァ書房。

——— [2011]：「ヴェルナー・ゾムバルトにおける「経済システム」と発展——『経済生活の秩序』における「文化領域」としての経済」、『経済学論究』第 64 巻第 4 号。

宮本憲一 [1994]：「「市場の欠陥」と「政府の欠陥」をどうのりこえるか」、宇沢弘文・宮本憲一他『社会の現実と経済学——21 世紀に向けて考える』岩波書店。

渡邊二郎・赤松明彦 [1998]：「直観」、『岩波 哲学・思想事典』岩波書店。